

# 石川さんご夫妻インタビュー

2012. 3. 6 (火) 狭山の事務所

今野：素人ですので、よろしくお願ひ致します。

一雄：何でも聞いて下さい、はい。

今野：石川さんのお年は？

一雄：いま、73です、はい。

今野：わたしの父と同じくらいだなあとお思いますね。ジョギングは毎日やられるんですか。

一雄：ええ、大体やっています。

今野：5キロくらい走るんですよね。何分くらいで走られるんですか。

一雄：17分くらいで。

今野：すごいですね。ジョギングだけじゃなくて、今日も聞きましたら、お昼お食べにならない？

一雄：はい。わたしは拘置所にいる時から2食にしたんです。朝はパン一個なんです。夕方は食べますけど、けっこうカロリーのあるものを。1200カロリー、大体その程度。そうでないと太っちゃうんです、わたしの場合。

(略)

今野：でもそれは裁判に勝利するためと言うか。

一雄：うーん裁判と言うよりも健康管理をすることが裁判に繋がっていきますけど。これでおしまいじゃないという

ことで、無罪になった時から人生を生きたいと言うことで。

今野：本当にお若い時から闘い続けておられてるんですからね。

一雄：そうですね。24歳の時から。

今野：普通では考えられないですね。

一雄：…

今野：そういう闘いというのは、石川さんにとっていかがでしたか。

#### ◆拘置所で

一雄：うーん、闘いって言うよりも、約15年くらいは勉強することが私の目的だった、最初はね。自分の無実を訴えるためには、知ってもらうことができないということから文字を取得することが目標だったんですよね。無我夢中で10年間過ごしました。

今野：刑務所で字を教えていただいたんですよね。

一雄：ええ。看守さんですね、元。

今野：その方のお話をお聞きしたいんですけど。どのような方だったんですか。

一雄：私が1964年に東京拘置所に行ったんです。4月に。たまたま3月に慶応大学を卒業してすぐ2カ月ちょっとで私を担当することになったんです。たまたま兄貴が犯人だと思っていたところを兄貴が面会に来て自分は犯人ではないということを行ったんです。そこで元看守さんが驚いたんです。自分が兄貴の身代りになってしまったということの経緯を教えてくださいということで、全部私が

犯人になったということの取り調べ官のやり取りを聞いてもらったんですよ。刑務官ですね。私たちを取り調べなくてはならない方なんですね。たまたま(その看守さんが)正義感が強かった。死刑囚を担当する刑務官だったんです。…看守さんの素晴らしいのは、難しいやさしいじゃなく、お前にこれから必要な字だからこれから習えと、看守さんなりに私が訴えたいような字を拾い出して、そして習わせてくださった。

**今野**：やさしいですね。

**一雄**：8年間、それをずーっと。(略)後でわかったことですけど、奥さんのほうがもっと素晴らしかったんですよ。石川一雄に字を教えるに当たっては、その一、場合によっては、死刑囚には物をくれたり教えたりすることは禁じられていたらしいですよ。

**今野**：そうなんですか。

**一雄**：ええ、それにもかかわらず、石川に字を教えているところにたまたま署長や課長が回ってきて、見つかるとう首ですから。それを奥さんに話したらしいですよ。そしたら奥さんが本当に石川さんが無実だと思うなら首になってもいいから、字を教えてやりなさいと、後のことは私(奥さん)に任せるということで、その奥さんがボールペンなんかを差し入れてくださった、ずーっと、8年間。…そういう手助けがあったから字を習えたんじゃないかと思います。

**今野**：素晴らしいお仕事だなあとと思いますよね。それがな

かったら裁判を闘えなかったというか。

一雄：闘えなかったと思います。

今野：うん、これだけのね、(壁の応援さして) たくさんの応援も得られなかったと思いますし。

#### ◆荊冠で繋がる

今野：私たちクリスチャンとしては、この荊冠旗がね、身近に感じるんですね。イエスさまが、かぶせられた荊の冠なんですね。十字架にかけられる前に兵士が、その辺に生えていた雑草みたいなもんだったそうです、棘があって、それを輪にして、無理やりかぶせて、そういう私たちが信じているイエス・キリストが受けた苦しみの象徴でもあるんですね。だからそういう意味でもクリスチャンはもっと部落のことに関心持っていんじゃないかな。

一雄：持ってもらいたいですね！持ってもらいたいですよ。

今野：僕も本当に身近に感じるというか、イエスさまが受けた苦しみを私たちも一緒に受けたいな、そう思うんですよ。

#### ◆差別に逃げたらだめ

早智子：私もちょっといいですか。あのね今、差別をどう克服していけるかということがあったんですけど、私自身のことを言えば、私も部落出身で、部落のこと隠してたんですね。就職する時も住所、ウソまで書いて隠してたんですよ。例えば、電車の中で『橋のない川』を読むんだって、部落のこと書いた本です、本を電車の中で読むなんて

とんでもないこと！私が部落って思われるとかね。そんな私だったんですよね。それが彼のメッセージに出会ったんですね。石川一雄さんのメッセージに、差別に逃げてたらだめだって。差別をなくすために自ら立ち上がって、それこそ荆の道を立ち上がって、自分が泣き寝入りせずに、立ち上がれ！！っていう彼のメッセージを聞いたんですよね。例えば『橋のない川』(本)が職場の机の上においてあってもドキッとするわたしがいる。どうしてかっていうとその本から部落の問題が出たらどうしようと言うね。逃げても差別はなくなるらない、逃げたら差別が追いかけてきました。そのときに彼のメッセージに出会ってわたしも逃げたらアカンと感じたんですよ。狭山の初めの集会の時に多くの人たちが石川一雄一人のために、共闘の人がいる、宗教者の人たちがいる、学校の先生がいる。あっ私も頑張ろうって思えたんですよね。それでわたしが自分自身を解き放つ、自分の殻を打ち破れた時だったんですよね。(今野：涙)そしたらそれからすごくほんとにね、職場の中で自由に部落問題、狭山のこと、石川一雄のこと話せる職場になりたい！って、思えたんですよね。1年2年たっていくうちに部落問題が当たり前に話せる、前はタブーですよ、こっから(首)先も出ない。でもどんどんみんなと話し合っていくときにわたしは変わっていくんですよね。

#### ◆教育って大事

それからもう1つはわたしが今から5年くらい前ですけど、高校時代の友達に久しぶりに会いました。で、20年ぶ

りくらいにあった時に、わたしは彼女にゆうたんですね、わたしはあなたに隠したけど私は部落だと。で、今は狭山に住んでいる石川一雄さんと一緒に冤罪をなくさなアカン、差別なくそうっていう運動をやっとなよって、彼女に言ったんですよ。そしたら彼女がね、さっちゃん部落知ってたって言うんです。で、どうしてって言ったら、(わたしたちが)高校に入学したでしょ、5月に知ったっていうんですよ。どうしてっていったら、(同じ中学から高校に入った子が)わたしと親友になった子に「さっちゃん部落よ」、気イつけよ、あんまり付き合うなよって言う意味ですよ。その時に彼女が言ったこと、そこなんですよ！彼女がこの人にね、「それがどうしたん？」って言ったんですって！関係ないって言ったんですって。えーって聞いて、それこそ四十年ぶりの真実ですよ。どうしてそう言うこと言えたの？って聞いたら彼女が言うには、実は小学校6年生の時に卒業式の前日に当時の校長先生が、いま小学校区には部落というものはないと、でも中学に行ったら被差別部落ってところの子が校区に入ってくる。でも差別は間違っているんだ、たぶん水平社宣言ですよ、「人間は尊敬されるべきもの。」人間は決していじめたり、差別してはアカン。一人一人とっても大切な命なんだ。人間の存在がとっても大事なんだって言うね。今から五十年、もっと前ですよ。ものすごく一生懸命、すごく伝わったって。だからそれがどうしたんって言えたって言うんです。それを聞いてね、人って教育って大事！そういうたった一人の人が一人

の人を、もしかしたら他の子たちを変えたかもしれない。だから、人って変わる！人って素敵だって、私が思えるでしょ！

#### ◆自分の中の差別

彼がよく言うんですよ、「百聞は一見にしかず」。現地を見て頂いたら分かるから。でもなかなか遠いから来られない。それも現実です。でもそれでも、あのお名前ちょっと教えて頂けます？

今野：今野と申します。

早智子：今野さんがその人たちにこうだったよって伝えることが、わたしたちの望みなんです。その校長先生が小学校6年生の子供に一所懸命伝えたい想いがすごく心に通じたっていうね。知らないと分かってもらえないこともあるんですけど…、伝えて頂きたいですね。すみません、余計にしゃべって。

今野：素晴らしい校長先生ですね！…僕もお話聞いて、以前は逃げれば逃げるほど差別が追いかけてくる。でも闘おうと思った瞬間に解放された！そこがスバラしいなあと!!

#### ◆差別の厳しさ

早智子：わたしの弟も部落隠せって教えられてきたでしょ。だから中学校の時に隣りが梨畑だったんですよ。梨が取られたときに、農家の方が学校にね、ここに来る生徒が梨取ったと怒ったんですね。先生が集めたのは部落の子ばかり3人。弟が入ってたんですよ。それで弟が「とってな

い、とってない」と言っても先生がとうとう最後まで信用してもらえなかったようなんです。今から 15 年前に裁判長に手紙を書いたんですね、(再審を訴える)要請のはがきを。自分は何十年も前、中学校で梨どろぼーにされたって。自分は一所懸命訴えたけれども先生は信用してくれなかったって。今でも悔しくって悔しくって腹が立って忘れられない。石川さんは梨どろぼーよりもっともっと重い、殺人犯っていうレッテルを貼られている。どうか石川さんの声を聴いてほしいってのはがきを書いてくれた。親は部落隠せ、差別されるだけだと。苦しいから隠せて言う生き方でしょ。わたしは例えば職場で、部落の人は臭いで分かるのよって言われたときに、親によう言わんかったんですよ。親が許さんぞって頑張ってる人だったら言えたと思うんですよ。こんな腹立つ!!って。部落の人は臭いで分かるって言われてクヤシイ、カナシイ、死ぬほど悔しい!って。それを声にもよう出せんかったっていうわたしがいるっていうことをね。親は悲しむだけだとわたしは思ったの、勝手にね。もしかしたら違ったかもしれない、その時(親は)立ち上がったかもしれないのに。

(一雄さんは)苦しいこといっぱいあったと思うんですよ。でも振り返るのは裁判勝ってからだと。今は前向いて生きるっていう。

#### ◆一人一人の解放

**今野**：でもそれは部落の方だけじゃないような気がしますね。そうでない人も乗り越えないとならないところですよ

ね。そしてそういう人たちも自らが解放されないと、そう思いますね。部落と関わるようになって一線を越えると言うか…。

**早智子**：しょうがい者がね、こうやって言ったんですね。しょうがいがあるよりしょうがい者差別があることが怖かった。確かに不自由なんですね、介護されなければ生きられない。不自由なだけで決して不幸ではない。差別があることが不幸なんだって言ったことが。私も胸に刻みますし。

自分が何もしなかったってことは差別を残してきた。例えばハンセン病の人とね。傍観視しているわたしがいる。部落の中にある時はね、自分も被害者だ被害者だって思ってたでしょ。だからなかなか気がつかないことを、また違う方を感じた時にね。あっ私も残してきた一人なんだって言うことを思いますよね。

例えば教会の人でもね、(部落のことに関わるのが)自分をもっともっと豊かにすることにつながっていくかなって思いますよね。ただなかなか差別につながることは一歩踏み込みにくいんですよね。例えばしょうがい者(に関わることは)、介護するのしんどいとか、時間がまた取られるなどかね。自分が豊かになるために行っているのではないんですよ。でもそういうことによってお互いにね、豊かになっていくということはすごく感じたんでね。

**一雄**：踏み出すまでがな、大変だと思うな。

**早智子**：やっぱり差別に関わることはな、ちょっとこれ差

別と思われたら嫌かなとか、これ言っていていいかなとか、いろんなことが悩むんですよね。最初は関わることは難しかったり大変ですけどね、関心持ってほしいと。

今野：それが一人一人の解放っていうか。

早智子：そうなんですよ!そこに繋がっていくんですよ。

今野：一人一人が自由にされる!

早智子：ほんと、そう思います。